

御 茶 屋 御 殿 跡

平成15・16・17年度遺構確認調査報告書

平成18(2006)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第40集

御 茶 屋 御 殿 跡

平成15・16・17年度遺構確認調査報告書

平成18(2006)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

この調査報告書は、文化庁の補助を受けて平成 15～17 年度に実施した、那覇市首里にある「御茶屋御殿（うぢややうどうん）跡」の発掘調査の成果を記録したものです。

御茶屋御殿は 1677 年に琉球王国の王家の別邸として創建されました。首里城の東側に位置していることから、琉球国王尚貞の冊封に中国清朝から派遣された正使汪楫はこれを「東苑」の名で記録しています。この別邸は国王の遊覧や国賓の歓待などに使用され、その際に詩歌、管弦、茶、生花、芸能などが催されました。昭和初期には国宝の候補にもなりましたが、建物は去る第二次大戦により消失しました。現在は首里カトリック教会、城南小学校の敷地となっており、往時の様子をうかがうことができなくなっています。

今回の発掘調査では御茶屋御殿跡の外縁部の確認を行いました。主な調査成果としては御茶屋御殿の際を固めていた当時の土留め石積みを確認することができたことが挙げられます。また、建物の屋根に葺かれていたと思われる赤瓦の破片も多数確認することができました。

この調査報告書が、王国時代の首里王府に関連する施設、建造物の様相を知るための基礎資料として、さらに沖縄の歴史と文化を理解するための研究、学習資料として広く活用されることを期待します。

末尾ながら、このたびの遺構発掘調査に格別の御理解と御協力を賜りました宗教法人カトリック沖縄教区、宗教法人首里カトリック教会、発掘調査および出土品の同定・分析等で御指導を賜りました諸先生方、ならびに事業の実施に際し御協力いただきました関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成 18(2006)年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 田場清志



卷首図版 1 御茶屋御殿跡（航空写真：1998年）



卷首圖版 2 出土遺物

例　　言

1. 本書は、2003（平成15）年度から2005（平成17）年度にかけて実施した「御茶屋御殿跡」の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は文化庁の補助を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが主体となって実施した。
3. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の1／25,000地形図、沖縄県公文書館保管の航空写真を使用した。
4. 本書に表した高度値は海拔高である。
5. 本書に掲載した航空写真は、国土地理院 98OKINAWA C60-48と沖縄県公文書館保管の米軍撮影写真（CV20-103-63）を使用した。
6. 本書は知念隆博・山本正昭を中心に、比嘉優子ほかの協力を得て編集を行った。各節の執筆者は以下に記す通りである。

山本　正昭	第1章1、2節・第2章3節・第3章・第5章・第6章
新垣　力	第2章1、2節
知念　隆博	第3章・第4章1、2節・第6章
岸本　竹美	第4章3節
7. 引用・参考文献は末尾に一括して記載した。
8. 本書に掲載された出土遺物の撮影及び現像・焼付は光嶋香・矢舟章浩が行った。
9. 今回の調査は、地権者の宗教法入カトリック沖縄教区、並びに首里カトリック教会の協力及び関係者の御厚意のもと、円滑に実施することができた。記して謝意を表する。
10. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

序

卷頭図版

例言

第1章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 平成12～14年度の遺構確認調査概要	7
第3章 調査経過	8
第4章 層序と遺構	9
第1節 平成15年度調査	9
第2節 平成16年度調査	12
第3節 平成17年度調査	14
第5章 出土遺物	17
第6章 総括	21

報告書抄録

図 目 次

第1図	沖縄本島の位置	3
第2図	御茶屋御殿跡の位置及び周辺の遺跡	4
第3図	平成15年度調査区北壁・東壁土層断面図	9
第4図	御茶屋御殿調査区及びグリッド設定図	10
第5図	平成15年度調査区平面図	11
第6図	平成16年度調査区平面図	12
第7図	平成16年度調査区東壁土層断面図・西側・北側石積立面図	13
第8図	平成17年度調査区及びグリッド配置図	15
第9図	平成17年度調査遺構・平面図及び立面図	16
第10図	出土遺物	20

図 版 目 次

図版1	平成12年度調査検出の茶亭建物基礎遺構	7
図版2	出土遺物	25
図版3	平成15年度調査状況1	27
図版4	平成15年度調査状況2	29
図版5	平成15年度調査状況3	31
図版6	平成15年度調査状況4	33
図版7	平成15年度調査状況5	35
図版8	平成16年度調査状況1	37
図版9	平成16年度調査状況2	39
図版10	平成16年度調査状況3	41
図版11	平成16年度調査状況4	43
図版12	平成16年度調査状況5	45
図版13	平成16年度調査状況6	47
図版14	平成16年度調査状況7	49
図版15	平成16年度調査状況8	51
図版16	平成16年度調査状況9	53
図版17	平成17年度調査状況1	55
図版18	平成17年度調査状況2	57
図版19	平成17年度調査状況3	59
図版20	平成17年度調査状況4	61
図版21	平成17年度調査状況5	63
図版22	平成17年度調査状況6	65
図版23	平成17年度調査状況7	67
図版24	平成17年度調査状況8	69
図版25	平成17年度調査状況9	71
図版26	平成17年度調査状況10	73
図版27	平成17年度調査状況11	75
図版28	平成17年度調査状況12	77
図版29	平成17年度調査状況13	79
図版30	平成17年度調査状況14	81

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

御茶屋御殿は1677年に創建された王家の別邸であり、国王の遊覧及び国賓の歓待に使用され、詩歌、管弦、茶、生花、芸能などが披露された。位置が首里城の東側であることから「東苑」とも称された。

御茶屋御殿が所在する那覇市首里は首里城を中心として琉球王国の政治・文化の中心地であり、首里城周辺には様々な施設が所在していた。しかし、第二次世界大戦には、首里城の地下に第32軍司令部壕が構築されていたことから、米軍の集中砲火を浴び、多くの文化財及び建造物が焼失した。

御茶屋御殿も米軍の砲火から逃れることは叶わず、茶亭南側の石積を残して、建物及び関連する施設は破壊された。

戦後は、首里カトリック教会として管理されており、往時の面影を残すのは、茶亭跡南側の石積だけという状態となっている。

首里城周辺の文化財の復元修理は、園比屋武御嶽石門を嚆矢として、首里城跡及び周辺の文化財の復元修理が次々と実施された。首里城跡を中心とした文化財の整備が進行していくこと、ならびに2000年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界文化遺産に指定されたことから、かつて王家の別邸として創建された御茶屋御殿の整備を望む声が県民の間に広がりをみせていた。

そのようなことから沖縄県教育委員会は御茶屋御殿跡の地下遺構の確認が必要との判断から、文化庁の補助を受け、平成12年度～平成14年度の3ヶ年を茶亭跡の確認調査、平成15年度～平成17年度に茶亭跡以外の確認調査を実施した。

第2節 調査体制

発掘調査は、平成15～17年度、資料整理及び報告書作成は平成17年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。その体制は以下の通りである（職名等は当時）。

平成15年度

事業主体者	沖縄県教育委員会	教 育 長	山内 彰
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所 長	安里 嗣淳
事業総括	同 上	副所長兼庶務課長	安富祖英紀
事業事務	同 上	副所長兼庶務課長	安富祖英紀
	同 上	庶務課 主査	比嘉美佐子
	同 上	庶務課 主任	西江 幸枝
	同 上	庶務課 主事	川元 哲哉
事業実施	同 上	調 査 課 長	盛本 素
	同 上	調 査 課 専 門 員	知念 隆博
	同 上	調 査 課 専 門 員	金城 達
	同 上	文化財調査嘱託員	新垣 力

発掘調査作業員

新垣キク、有田康信、奥我フジ子、佐渡山正子、當間フミ、中塙未子、比嘉洋子、真栄城千枝子、宮国恵子、山内淳、与那嶺勢津子

資料整理作業員

田村浩子、與那覇寛

平成 16 年度

事業主体者	沖縄県教育委員会	教 育 長	山内 彰
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所 長	安里 嗣淳
事業総括	同 上	副所長兼庶務課長	赤嶺 正幸
事業事務	同 上	副所長兼庶務課長	赤嶺 正幸
	同 上	庶務課 主査	比嘉美佐子
	同 上	庶務課 主査	西江 幸枝
	同 上	庶務課 主事	城間奈津子
事業実施	同 上	調査課 長	盛本 烈
	同 上	調査課 専門員	知念 隆博
	同 上	文化財調査嘱託員	宮城 奈緒

発掘調査作業員

新垣範久、石垣浩充、具志堅有紀、吳我フジ子、小橋川哲、崎濱スエ子、佐渡山正子、仲程健、中村フサ子、比嘉洋子、平安名哲子、宮城悦子、宮国恵子

資料整理作業員

玉寄智恵子、仲間留美、諸久村泰子

平成 17 年度

事業主体者	沖縄県教育委員会	教 育 長	仲宗根用英
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所 長	田場 清志
事業総括	同 上	副所長兼庶務課長	赤嶺 正幸
事業事務	同 上	庶務課 主査	比嘉美佐子
	同 上	庶務課 主査	山田恵美子
	同 上	庶務課 主任	城間奈津子
事業実施	同 上	調査課 長	岸本 義彦
	同 上	調査課 専門員	山本 正昭
	同 上	調査課 専門員	青山 奈緒
	同 上	調査課 専門員	岸本 竹美

資料整理作業員

玉寄智恵子、宮平妃奈子、真榮城和美

資料整理作業協力者

大城孝仁、仲田 均、比嘉洋子、川上益子、島仲恵子、佐渡山正子

調査協力者

我如古みどり、吉村政博、石垣浩光、浦崎京子、諸見里幸子、中村フサ子、大宜見より子、泉屋 堅、与那嶼勢津子、比嘉洋子、金城克子、比嘉優子、上原園子、外間 瞳、城間いづみ、城間千鶴子、照屋利子、藤田奈緒美、石嶺真由美

なお、調査にあたって以下の方々に協力を得た。末文ながら感謝の意を記す。(以下、敬称略)

大城 清正(首里カトリック教会神父)、押川 壽夫(カトリック沖縄教区事務所代表役員)、渡久川兼義(宗教法人 カトリック教沖縄教区事務所事務総務)、平山 政子(首里カトリック幼稚園園長)、真榮平房敏(那覇市文化財審議委員会委員)、平良 良信(那覇市首里当蔵町在住)



第1図 沖縄本島の位置



第2図 御茶屋御跡の位置及び周辺の遺跡

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

那覇市は、東側の分水界付近に広がる第四紀層の琉球石灰岩台地と、東シナ海に面する沖積低地とに代表される対照的な地形を示している。遺跡の所在する首里は首里台地と呼ばれる琉球石灰岩の台地に形成された町で、標高120～130mの丘陵上には琉球国王の居城である首里城が立地し、14世紀以降から王府時代の終末期までの永きに渡り王都として栄えていた。

その首里城の南東側、すなわち首里台地南東部の急崖上に崎山は位置する。崎山は樹林に覆われた丘陵部と、眼下を流れる安里川に沿う低地部とに大きく分かれ、東側には那覇市の最高所（標高165.7m）である弁ヶ嶽がそびえ、そこから連なる丘陵が北側を取り囲んでいる。今回の調査地である御茶屋御殿は崎山の丘陵上（標高約130m）に所在した旧王家の別邸である。かつて国王の遊覧及び國賓の歓待に使用された施設で、また沖縄本島南部一帯を遠望できる有数の景勝地でもあった。

首里台地を形成する琉球石灰岩の下部には、新第三紀の砂岩・泥岩からなる島尻層群が基盤層として広がっており、この島尻層群を不透水層として、琉球石灰岩との不整合部分からの湧泉が各所で確認されている。特に遺跡の所在する首里は湧泉の豊富な地域で、首里城内やその周辺に龍樋や金城大樋川などの湧泉が多数点在する。

ちなみに、調査区である首里カトリック教会の敷地内にも湧泉が存在し、現在も枯れることなく飲料可能な水を湛えている。

第2節 歴史的環境

「崎山」の地名は、首里城及び赤田の先に当たる山（山は樹林の意）から出たとされているが、首里台地東端の突き出た地形に由来するとの説もある。隣接する赤田や鳥堀と合わせて首里三箇と称され、首里の中でも特色ある地域といわれる崎山は、古くから庶民の家が密集する首里地区有数の居住地であった。

かつてこの地にあった御茶屋御殿は、阿氏伊倉堂親方守淨を普請奉行に任じて1677（尚真9）年の4月に着工し、その翌月には竣工したとされている。全城10,000m²にも及ぶ敷地内には望仙閣・能仁堂・茶亭が並び、周辺には築山や池、石造物が配されるなど、独特的意匠を凝らした庭園造りがなされていた。敷地の北側（現在は城南小学校が所在する場所）には菜園が広がり、そこでは様々な菜種の栽培が行われていた。

現在敷地内には建物は残っておらず、その構造や様式については判然としない。だが茶亭に関しては唯一写真や平面図等の記録が残されており、往時の状況を窺い知ることができる。それによると茶亭は木造入母屋造り（北側のみ繒破風）で、正面には屋根を掛けた出入口が設けられる。屋根は本瓦葺で明朝系瓦を用いており、瓦は漆喰で巻かれている。また比較的床が高く、部屋の周囲に幅広の縁側を巡らせることが雨端の代用としている。

御茶屋御殿は王家の別邸であるとともに、國賓の歓待にも使用された施設で、詩歌・管弦の催しや茶道・生花・武道・囲碁などの様々な芸能が披露された。その様子は山内親方の記した『御茶屋御殿諸芸つくし』や、豊川親方の雅文である『於御茶屋諸芸づくしの時』などに見られる。また吉屋思鶴の作と伝えられる「拝で拝んぶしゃ首里天加那志 遊で浮ちやがゆる御茶屋御殿」の歌からは、当時御茶屋御殿という施設が非常に有名であり、かつ庶民の憧れの場所として捉えられていたことが理解される。

さらに御茶屋御殿は北に浦添及び弁ヶ嶽、南に識名及び八重瀬岳、東に知念半島及び久高島、西に那覇及び慶良間諸島を望むことのできる中山第一の景勝地でもあった。この情景については、汪楫の『使琉球雜錄』、徐葆光の『中山伝信録』、周煌の『琉球國志略』などの冊封使の記録が残されているが、特に有名なものとしては名護親方の『東庵八景』が挙げられる。『東庵八景』は東海朝暉・西嶼流霞・南郊麦浪・北峯翠碧・石洞獅蹲・雲亭龍涎・松径凌声・仁堂月色の八題からなる漢詩で、前半の

四首には御茶屋御殿から見る情景が、後半の四首には敷地内の様子が詠まれている。この中の「石洞獅蹲」に登場する石造獅子は先の戦争で破壊されたが、現在は修復されており、御茶屋御殿関連の文化財として唯一有形民俗文化財の指定を受けている。ちなみに「東苑」とは、汪洋により首里城の東方に位置する庭園の意として命名された名である。

御茶屋御殿が王家の別邸であるとともに、外国使臣の歓待にも用いられていたことは前述の通りである。しかし 1800(尚温 6)年に来琉した冊封使李鼎元の『使琉球記』から、国賓のための宴を行いう場は天使館及び首里城、宴とは別に一席を設ける場は御茶屋御殿と用途による使い分けがなされていたことや、前年(尚温 5)年に識名園が造営されているが、その後も御茶屋御殿が利用されていたことなどが窺える。また 1682 年(尚貞 14)年には道を挟んだ場所に崎山御殿が創建され、御茶屋御殿と同様に王家の別邸として利用されたが、後世の記録ではこの崎山御殿がしばしば御茶屋御殿と混同される傾向にある。

尚泰王代まで使用された御茶屋御殿は、廃藩置県後に琉球国王の東京への移動に伴い、首里城とともにその役割を失った。その後、首里城は熊本鎮台沖縄分遣隊の兵舎 1879 ~ 1896(明治 12 ~ 29) 年や、首里市立女子工芸学校・沖縄県立工業徒弟学校・首里城第一尋常小学校の校舎 1896 ~ 1945(明治 29 ~ 昭和 20) 年として利用されたが、ほとんどの施設は手付かずの状態で放置され、荒廃の一途を辿っていった。御茶屋御殿も例に漏れず、1882(明治 15)年に来沖した尾崎三良の日記に「廃藩旧王東京に移りしより以来これを修理するものなし。庭園蘚棘蘚階を没し堂宇破壊、鼠糞散漫、客櫻の滋を覚えず、顧れば悲風飄々たり、夏日尚冷氣を覚う」と記されるほど(註 1)、この頃には老朽化が進み廃墟と化していた。北側に広がる樹林は開墾されて農耕地となっており、1898(明治 31)年に隣接する崎山御殿も民間に払い下げられた。しかし当時の文部省文部技官であった阪田良之進の尽力により、1930(昭和 5)年に首里城正殿とともに御茶屋御殿の改修工事が実施され、往時の姿を再現するまでになった。ただ御茶屋御殿に関しては敷地内の全ての建物が修復されたのではなく、対象となつたのは茶亭・茶亭に伴う離れの廬・管理人の生活する御番屋の 3 棟のみであった。それでも田辯泰が「規模結構はともに比較にならぬが、南苑(識名園)を桂離宮に例えるならば、東苑(御茶屋御殿)は修学院離宮に模すべきものであろう」と称したように(註 2)、御茶屋御殿は戦災で消失するまでの間、旧国宝の第一候補としての偉容を誇っていた。

その後、沖縄全土は先の大戦により壊滅的な被害を受け、首里城をはじめとする貴重な文化財もここごとく灰燼に帰した。首里一帯は戦後しばらく立ち入りが禁じられ、ようやく人々が帰住し始めたのは 1945(昭和 20)年の 12 月からであった。御茶屋御殿も他の文化財と同様に建物は完全に破壊され、敷地内は旧状を留めない状態にまで変貌した。跡地は戦後、一時期は首里及び沖縄各地で収容された遺骨の集積所となっていたが、1952(昭和 27)年に尚家からカトリック教会に払い下げられた。その後は同年 12 月の仮御堂の設置を皮切りに司祭館や学生館、1956(昭和 31)年に教会の本会堂、1959(昭和 34)年に教会付属の幼稚園が相次いで建設された。また時期は前後するが、1946(昭和 21)年には北側の菜園跡に城南小学校が建設されるなど、御茶屋御殿の跡地及びその周辺は大きく様相を変えて、現在に至っている。

今日、崎山はかつての賑わいを取り戻し、首里有数の快適な居住地となっている。前述のように御茶屋御殿の跡地は首里カトリック教会となり、特に茶庭の跡にはスクールバスの車庫が建てられるなど、一帯に往時の姿を偲ばせるものは皆無に近い。唯一戦後に修復された石造獅子も雨乞嶽に移動されているが、茶亭南側の石積のみがほぼ完全な状態を保っており、僅かに昔の面影を残している。

第3節 平成12～14年度の遺構確認調査概要

御茶屋御殿跡遺構確認調査は沖縄県教育委員会が当該遺跡の歴史的重要性を鑑みて平成12年度から遺構確認調査を実施した。戦前の古写真で見ることのできる茶亭等の建物基礎やそれに伴う遺構の検出を目的に平成12年度は首里カトリック教会車庫の東側と北側、平成13年度は同車庫の東側、平成14年度は首里カトリック幼稚園駐車場の西側にそれぞれ調査区を設定、調査面積計177m²を発掘した。

これら3カ年の主な調査成果としては茶亭の基礎に相当する礎石やそれに伴う石列遺構が確認されたのをはじめ、茶亭の離れ廻と想定される石組み遺構も確認された。聞き取り調査も同時に実施し、建物跡に伴う遺構は場所や規模からほぼ茶亭に相違ないと見解が得られた。また御茶屋御殿造営に伴って平場造成があったことも確認された。他には拝所と思われる琉球石灰岩を階段状に加工した遺構も確認されたが、聞き取り等で詳細を知ることはできなかった。御茶屋御殿以前の遺構も一部確認されている。建物跡の下層から石積み遺構が検出されたことから御茶屋御殿造営以前にも当該地に何らかの施設が存在していたことも判明した。

出土遺物については中国産陶磁器、タイ産土器、本土産陶磁器、陶質土器、瓦質土器、土器、瓦、円盤状製品、銭貨、煙管、金属製品、石製品、自然遺物等が出土している。中国産陶磁器は15～16世紀、本土産陶磁器や沖縄産陶器では17世紀以降に相当する遺物が主に得られている。注目される遺物としては額受や役瓦が得られている。



図版1 平成12年度調査検出の茶亭建物基礎遺構

第3章 調査経過

平成 15 年度

平成 15 年度は、御茶屋御殿の敷地入口周辺の米軍撮影の空中写真に写っている建物の遺構確認を目的として、調査を行った。

調査箇所として、平成 14 年度の測量基準を基に 5 m × 5 m のグリッドを設定した。掘下げは手作業により行い、表土は遺物を含むが非常に浅く、また搅乱を受けている部分もあった。その後は、遺物を含まない褐色の層であり、地山と考えられたが、さらに下層の琉球石灰岩岩盤の僅か上層から白磁、染付を包含する層が確認された。

遺構としては、明確なものは確認できなかったが、表土の落込みのようなものが確認されている。

また、茶亭跡東側斜面下の比較的新しい石積が確認できる部分で、3ヶ所に確認トレンチを設定し、石積の構築状況及び時代の確認、斜面の構造の確認を行った。結果としては、石積はそれほど遡らない時期のものである可能性が高い。

平成 16 年度

平成 16 年度は、茶亭跡から離れ、儀間真常の墓の東側に位置する石積の調査を行った。当初から石積は露出していたが、石積と御茶屋御殿との関係を確認することを目的とした。調査区の設定は、平成 15 年の測量基準を基に設定した。調査の結果、石積は上部へ伸びていたが、何らかの原因により、現在の高さで崩れたこと、石積の両端で曲線を描くことを確認した。また、石積は第三紀泥岩上に設置されているため、滑り止めとして、3 ~ 5cm 程度の琉球石灰岩を嵌め込んでいる部分があることも確認できた。

石積の調査に予想以上に時間がかかったことから、予定していた茶亭を取り囲む石積の確認調査を平成 17 年度に延期することとした。

平成 17 年度

平成 17 年度は、平成 12 ~ 14 年度で確認された茶亭跡の南側斜面において、石積み遺構の確認を目的として 8 月 1 日から調査を開始した。調査開始の時点で、南側斜面に石積みの一部と思われる石灰岩が露出していたため、その周囲にトレンチを設定して堀り下げを行った。トレンチ掘り下げ開始後、すぐに南向きに面を持った石積み遺構が良好な状態で検出されたため、トレンチを拡張して全体像の把握に努めた。石積み直下には遺物を含まないクチャ層が確認でき、石積みの最下部と判断して堀り下げを終了した。石積み遺構北側には北向きに面を持った石灰岩が東西に並んだ状態で検出できため、石積み遺構の北端面であると判断した。崩落によりやや不規則な並びではあるが、これにより石積みの幅が推定できた。南東～東側斜面においては、トレンチを 3 箇所設定して堀り下げを行つたが石積みやその他の遺構・遺物が確認できなかったため、石積みの東側への延長は無いと判断した。調査終了後は土嚢袋で遺構を養生し、埋め戻しを行つて原状回復に努めた。

第4章 層序と遺構

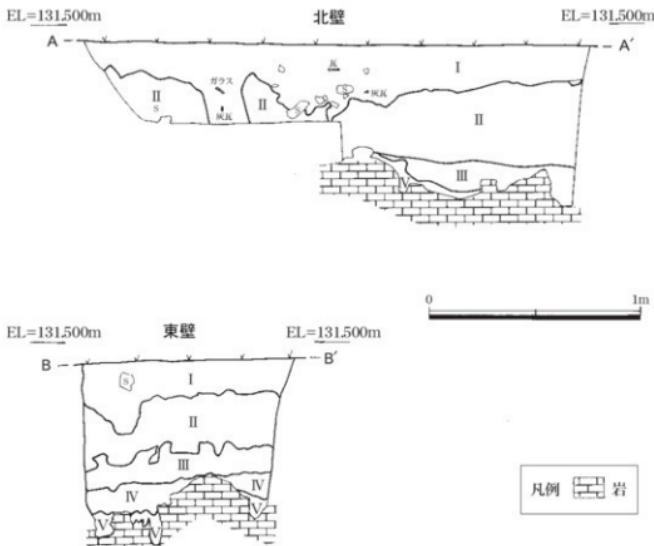
第1節 平成15年度

1. 層序

平成15年度は御茶屋御殿跡の入口周辺と茶亭跡の東側斜面を調査した。入口周辺の層序は、上層は戦後の地形改変等の影響を受けているが、下層は影響が少ない状況であった。茶亭跡東側斜面については、造成が行われており、造成土の直下より第三紀島尻層泥岩の地山であった。以下に各調査区の層序について略述する。

入口周辺（第3図）

- I層—表土。僅かではあるがサンゴを含む箇所がある。
- II層—褐色土層。暗褐色土が混在する。粘性をもつ。遺物を少量含む。
- III層—褐色土層。II層より黄色味が強い。粘性をもつ。
- IV層—暗褐色土層。遺物を少量含む。
- V層—明褐色土層。地山。



第3図 平成15年度調査区北壁・東壁土層断面図

茶亭跡東側斜面

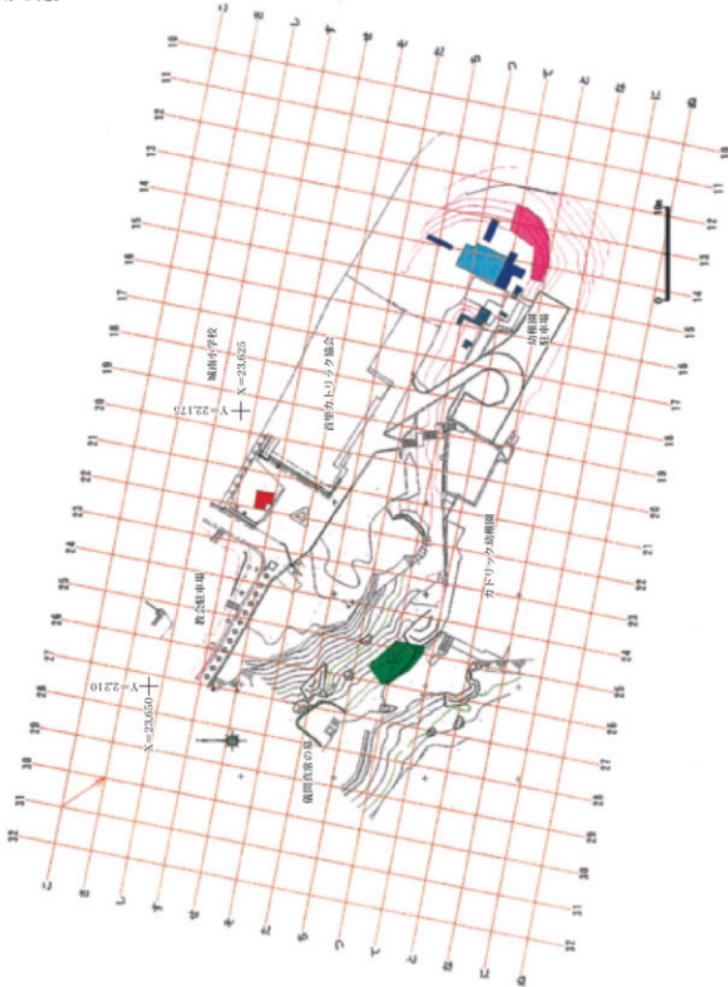
1層-表土。

II層=青灰色粘土層。第三紀島尻層泥岩であるが、他の場所より持ち込まれた可能性が高い。

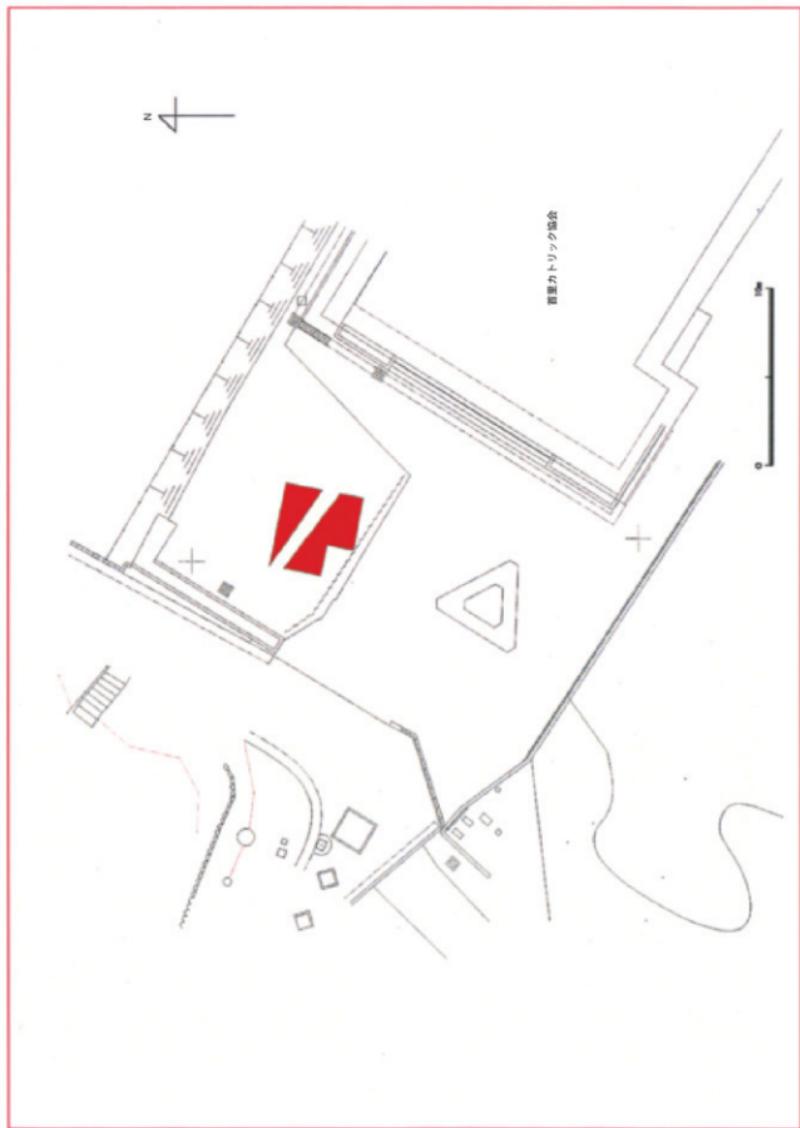
III層=青灰色粘土層。緻密で硬い。地山。

2. 遺構

遺構は確認されていないが、入口周辺より柱穴のように落込むものがあったが、明確に確認できなかつた。



第4圖 御茶屋御殿調查区及びグリット設定図



第5図 平成15年調査区平面図

第2節 平成16年度

1. 層序（第7図）

平成16年度は露出していた石積の構造を確認することが目的であったため、層序の確認を慎重に行つた。結果として、良好な状態で保存されていることがわかった。以下に層序について略述する。

I層－表土。腐葉土である。

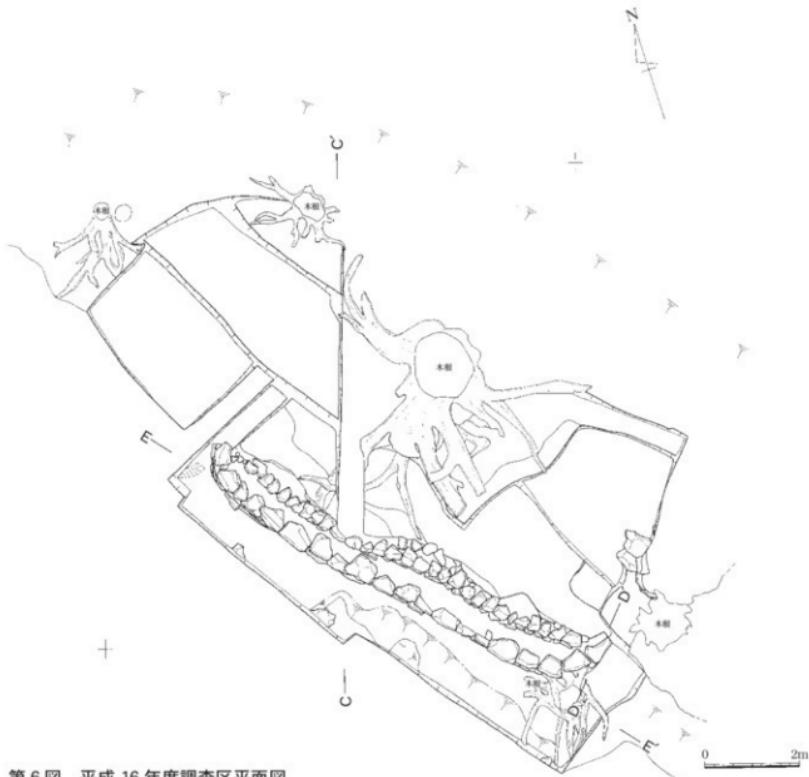
II層－黄褐色土。石積の後背にのみ分布。粘性をもつ。遺物を少量含む。

III層－褐色土。第3紀泥岩を主とする。粘性をもつ。遺物は少量含む。

IV層－青灰色粘土層。緻密で硬い。地山。

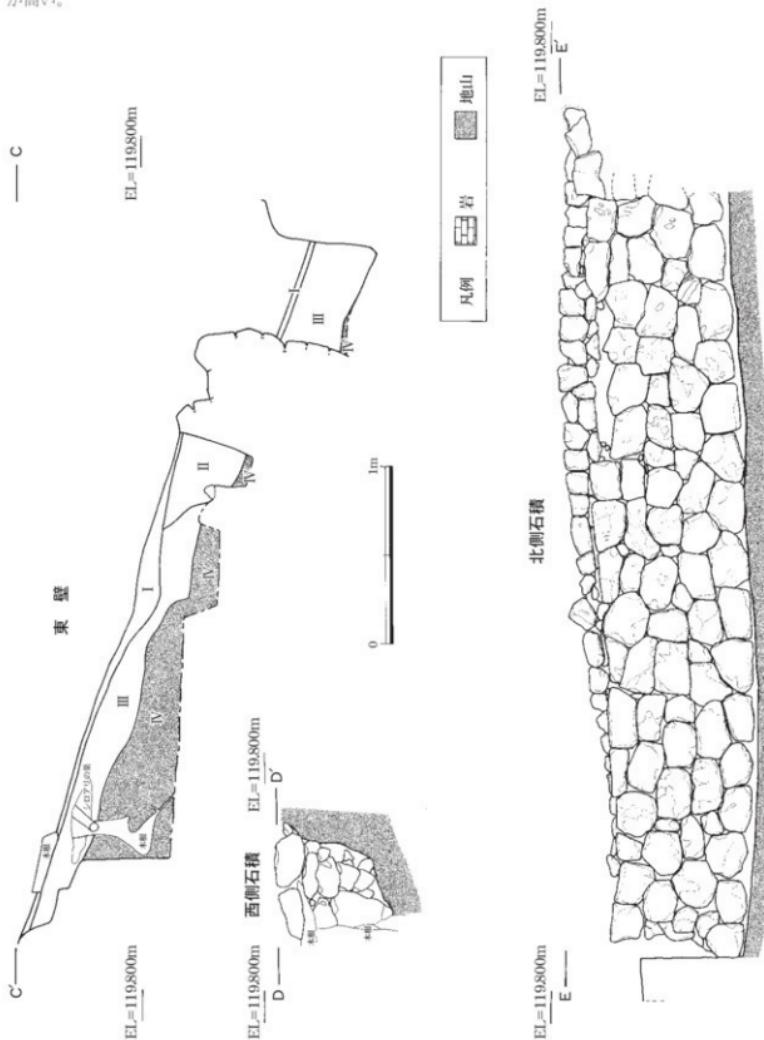
2. 石積遺構（第6・7図）

石積の方向としては東西方向であり、東西両端では曲線を描いている。東端では岩に添えつくが、西端では石積が途切れしており、本来の形を確認することはできなかった。石積の下層を確認すると、5段程度で地山から積み上げられていることがわかった。根石は直接据え付けているが、西端では、3～5cm程の琉球石灰岩の礫を数個配置していることを確認した。また、石積の後背には栗石は詰め



第6図 平成16年度調査区平面図

られず、Ⅲ層及びⅣ層を掘削し、石積を構築した後にⅡ層を入れて固めたことがわかった。この石積の性格としては、斜面地の下に構築されていること、地盤が第三紀島尻層泥岩のため地滑りが起こりやすいこと、御茶屋御殿の中心から離れていることなどから土留めとしての機能を有していた可能性が高い。



第7図 平成16年度調査区東壁土層断面図・西側・北側石積立面図

第3節 平成17年度調査

平成17年度の調査では、平成12年度～平成13年度に確認された茶亭跡の周辺に廻らされている石積みの範囲確認の為、6カ所のトレンチを設定して調査をおこなった。まず調査区東側の、琉球石灰岩が三つ据え置かれている場所にトレンチ1を設定して10cmほど掘り下げたが、地山（クチャ層）のみが確認された。首里カトリック教会の大城清正神父によると、戦後作られた土留めのための石であるとのことであった。また、琉球石灰岩が露出していた調査区南西側にトレンチ2、調査区南東側にトレンチ3を設定、調査区北東にトレンチ4、調査区南東にトレンチ6を設定したが、トレンチ4・トレンチ6は地山（クチャ層）のみが確認され、明確な層序が確認されたのはトレンチ2・トレンチ3の2カ所であった。また、石積み南側の根石確認の為にトレンチ5を設定したが、50cm掘り下げたところで地山（クチャ層）が確認されたため、露出している石が根石であることがわかった。以下、本調査において確認された層序を記す。

トレンチ2（第9図2、4）

I a層：黄褐色土層。表土層。戦後の搅乱層でブロック状のクチャや瓦片を含む。層厚約15cm～30cm。

I b層：暗灰黄色土層。1～5cm大の礫や瓦、炭、ガラス片などを含む搅乱層。層厚約20cm～35cm。

II層：オリーブ褐色土層。地山直上の無遺物層。クチャ層で細かい砂礫を含み、硬く締まっている。層厚約25cm。

III層：暗灰黄色土層。この層を掘り込んだ上で石積みを積んでいると思われる。調査区一帯の基盤層である第三紀島尻層泥岩（クチャ）。マンガンを多量に含み、クチャがブロック状に密に入る。

トレンチ3（第9図3）

I層：暗褐色砂質土層。石積み構築の際の造成層だと思われる。細かな砂粒が混入。層厚約10cm～20cm。

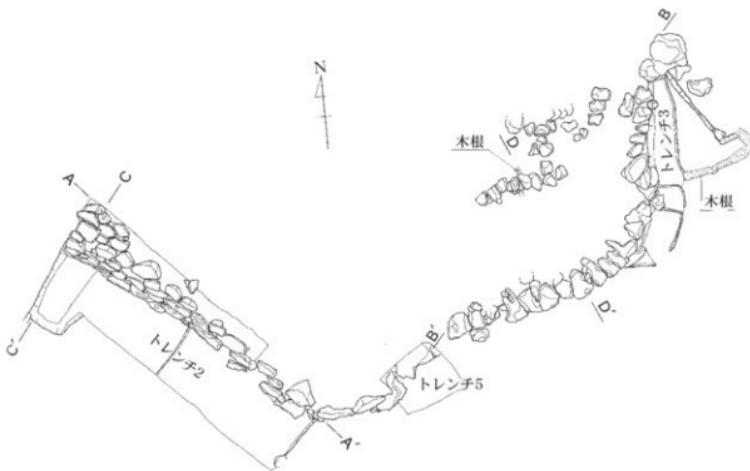
II層：暗灰黄色土。調査区一帯の基盤層である第三紀島尻層泥岩（クチャ）。マンガンを多量に含み、クチャがブロック状に密に入る。トレンチ2のIII層に対応する。

石積み遺構（第9図1）

茶亭西側から南側にかけて残存している石積みにつながる遺構である。石積みが露出していた部分にトレンチを設定し、最下部までの確認を行った。崩落のため明確な天端は確認できなかった。トレンチ2（石積み西側）では丁寧に加工された琉球石灰岩があいかた積みになっているのに対し、トレンチ3（石積み東側）及び石積み南側は崩落による破損が著しく、10～40cm大に荒加工された根石部分のみが確認された。また、トレンチ2（石積み西側）では調査区一帯の基盤層であるクチャ層を掘り込んだ上で石を積みあげられているのに対し、トレンチ3（石積み東側）ではクチャ層に造成をした上で石を積み上げている。また東側からは石積みの裏込め石が集中して検出された。斜面となっている地形にあわせて、南側へU字形に大きくカーブしており、東側で岩盤にぶつかる形になっている。遺構に伴う遺物がないため構築年代は不明である。

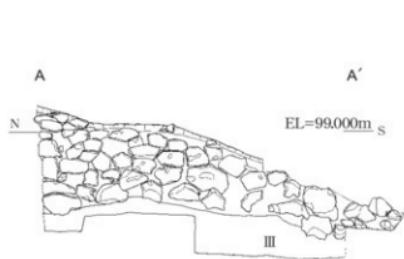
第8図 平成17年調査区及びグリット配置図





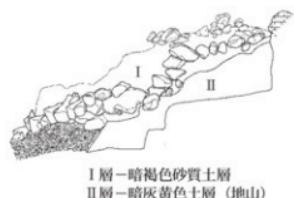
第9図1 石積造構平面図（トレンチ2・トレンチ5・トレンチ3）

0 2m



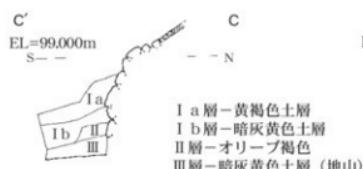
第9図2 石積東側立面図（A-A'ライン）

B'
S EL=100.500m
N



第9図3 石積西側立面図（B-B'ライン）

凡例 岩 土



第9図4 石積見通し断面図（C-C'ライン）



第9図5 石積断面図（D-D'ライン）

第9図 平成17年度調査区・石積造構平面図及び立面図

第5章 出土遺物

出土遺物は中国産陶磁器（青磁、白磁、染付）、土器、瓦、本土産陶磁器、埴輪、沖縄産陶器が出土している。遺物の出土量は極めて少なく、とくに平成17年度の調査では赤瓦の細片資料以外に遺物は出土していない。時期に関してはおよそ15世紀まで遡る青磁や白磁といった中国産陶磁器も若干であるが得られているものの、大半が近世以降の遺物である。また、土器や埴輪と言った御茶屋御殿と直接関わりを有しない遺物も見られることから、当該遺跡は複合的な要素を有する遺跡であると考えられる。

平成12～14年度の遺構確認調査で得られた遺物と比較する限りでは15世紀から近世までと幅広い時期の遺物が得られている点で共通するが、遺跡の主体部と縁辺部といった違いからか全体量としては圧倒的な差が見られた。また戦後の櫻乱層である遺構理土から出土した遺物がほとんどであったことから、直接的に御茶屋御殿の時期を知る資料は得られなかった。因みに今回は紙数の都合で割愛するが前回の調査と同様にガラス片や沖縄戦時の砲弾片も多数出土しており、当該地が近代から現代にかけて断続的に土地利用がなされていたことも確認された。

以下、主要な出土遺物について種類別に触れていくことにする。

第10図1図版2-1 青磁碗。直口口縁で口唇部は丸みを有する。全体的に器壁は厚く、特に底面中央は1.1cmの厚みを有する。高台はやや高いが底面の内側は浅く、断面形は台形状となる。疊付は水平に切られているが、施釉により丸みを有する。高台内面には白色粗砂が溶着している。文様は外面口縁下部に略化された雷文帯が見られる。雷文はほとんど崩れしており一見、波状文様に見える。内底面には圓線が1条見られる。外面胴部には回転箆削痕を明瞭に確認することができる。釉は淡青色を呈し、高台内面から外底面にかけては露胎となり、他は全体的に薄く施される。粗い貫入が一部見られるが全体的には確認されない。胎土は密で黒、褐色のやや粗い微粒子が混入する。また大小の気泡が確認できる。口径13.4cm、高台径6.5cm、器高5.5～5.8cm。平成15年度 す-22 IV層出土。

第10図3図版2-3 青磁の瓶若しくは壺の胴部資料。器壁は厚く、外面には箆描きで大振りの唐草文が内面には圓線が1条見られる。青緑色の釉を内外面共に厚く施す。胎土は密で黒、黒色微粒子が僅かに、気泡は多く見られる。貫入は見られない。平成16年度 つ-26 II層出土。

第10図2図版2-2 青磁の小型壺。口縁部から胴下部までの資料。口縁部は直口し、肩部はやや張る。胴部は下方へ漸次、器壁が薄くなる。口唇部は水平となり、やや幅広い。頭部は短く、胴部はやや丸みを有しながら底部へ移行する。文様は見られない。内外面共に細かい貫入が不明瞭ながら見られる。オリーブ色の釉を内外面共に厚く施すが、口唇部のみは薄く一部で露胎となる。胎土はやや粗く、黄白色を呈し、大粒の褐色粗砂が僅かに混入する。内面に一部、凹凸が見られるが全体的に丁寧な造りとなる。口径6.4cm。平成16年度 つ-26 II層出土。

第10図4図版2-4 白磁碗の胴下部から底部にかけての資料。高台は低く、「ハ」の字状に外へ開く。疊付は水平となり胴部の立ち上がりは若干、急である。器表は摩耗が著しく、文様等は窓うことはできない。釉は高台下部と疊付が露胎となる。全体的に薄く施釉される。胎土は密で、黄白色を呈し、小さい気泡が多く見られる。外底面には粘土の小塊が溶着する。高台径4.8cm。平成16年度 ち-26 表土出土。

第10図5 図版2-5 白磁盤の底部資料。高台は低く、薄い。断面形が台形状となり、「ハ」の字状に外へ開く。疊付は水平で、幅は一定ではない。胴部、底部共に器壁が厚く、胴部の立ち上がりは緩やかとなる。外面高台途中から外底面にかけて露胎となり、内面は全釉される。外面は釉垂れが見られる。胎土は密で黄白色を呈し、大小の気泡が多く見られる。貫入は見られない。高台径10.2cm。平成15年度 す-22 IV層出土。

第10図6 図版2-6 中国産染付の底部資料。内底面に唐草文が描かれる。施釉は椎で胴部と高台の境は一部露胎となり、また内面高台下部のみ露胎となる。呉須の発色は鈍く、全体的に薄い。器表には小孔が僅かに見られる。胎土は密で白色微粒子が僅かに見られる。大小の気泡が多く見られる。外面に粗い貫入が僅かに見られる。平成16年度 つ-6 II層出土。

第10図7 図版2-7 本土産色絵皿の口縁部から胴部にかけての資料。口縁部は外反し、胴部は丸みを有しながら移行する。外面には釉上に朱で梅花文と雲文が描かれる。また葉は緑青色、蕾は黄色で色付けされる。内面は口縁部直下に圓線と、朱で文様が描かれる。透明釉が内外面共に薄く施される。胎土は密で小さい気泡が僅かに見られる。口径14.0cm。平成15年度 す-22 I層出土。

第10図8 本土産磁器。型紙刷り小型の火炉で円筒形を呈する。高台は低く内割りも浅い。全体的に器壁は厚い。口唇部は藍色の釉が施釉され、口縁部直下には菊花文帯が胴部には桐文と鳳凰文が深緑色の釉で型紙刷りを用いて描かれる。内外面共に回転輪轍成形痕が明瞭に見られる。釉について外面は、底面以外は全釉され、内面は胴上部のみ施釉される。胴下部から内底面にかけては露胎となる。胎土は密。口径10cm、高台径9.5cm、器高7.7cm。平成16年度 表土出土。

第10図9 図版2-8 沖縄産陶器の蓋。楕円形状の摘みが中央に付き、下面には高い掛かりが付く。径は5.9cmと小さく、上面のみ瑠璃色の釉が施される。下面は露胎となる。摘みの中央には孔が開けられており、下面まで貫通する。端部は薄くなり、丸く収める。貫入は見られない。胎土は密で黒色粗粒子が多く見られる。平成16年度 つ-26 II層出土。

第10図12 図版2-11 沖縄産陶器の煙管。全体的に面取りが成されており、丁寧な造りとなっている。胎土は密で赤橙色を呈する。釉は施されていない。全長3.8cm。平成15年度 す-22 II層出土。

第10図13 図版2-12 陶質土器の火炉。小片のため全形を窺うことはできないが、全体的に薄手で、上部に幅広の圓線が一条見られる。胎土は密で混和材として雲母が見られる。平成16年度 ち-26 表土出土。

第10図10 図版2-9 沖縄産陶器の大型壺。無釉陶器壺の胴部資料で、中央に櫛描きによる波状文とその上部、下部に丸彫りによる波状文が描かれる。これら波状文にぶつかる形で貼り付けの丸文が見られる。裏面には横位の成形痕が見られる。胎土は密で小さい気泡が見られる。平成16年度 つ-26 搅乱層出土。

第10図11 図版2-10 沖縄産陶器の擂鉢。底部から胴部にかけての資料で内面には放射状に、かつ全面的に溝が刻まれる。器壁は全体的に厚いが底部のみ薄くなる。底部は水平であるがやや凹凸が見られ、胴部へはやや膨らみを有しながら移行する。外面には横位の成形痕が明瞭に確認することができる。胎土は密で大粒の赤褐色粒子が僅かに混入する。大きい気泡が僅かに見られる。底径9.4cm。平成16年度 ち-28 II層出土。

第10図16 図版2-15 平瓦。凸面は丁寧に成形が成されており、凹面には布目痕が明瞭に見られる。胎土は密で、赤褐色微粒子が多く混入する。焼成は良好で全体的に暗褐色を呈する。平成16年度 つ-26 表土出土。

第10図17 図版2-16 軒丸瓦。瓦当には略化された肉厚の牡丹文とその周囲には珠文がまばらに配される。縁幅は一定ではなく全体的に凹凸が見られる。裏面には指ナデによる成形痕が見られるが一定方向ではなく、かなり雑に仕上げている。全体的に赤褐色を呈し、胎土は密で大小の気泡が多く見られる。白色微粒子が僅かに混入する。平成16年度 ち-25 表土出土。

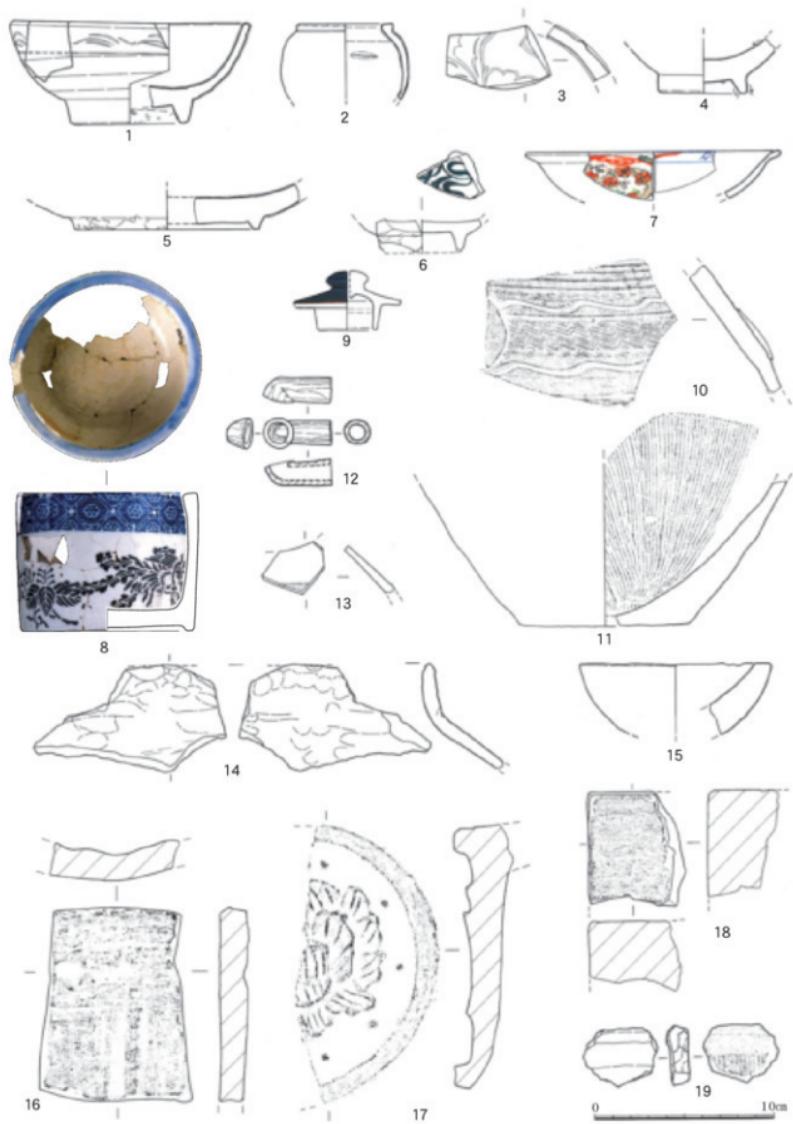
第10図18 図版2-17 塚。細片資料であるが3面確認できる。表面の成形は丁寧であるが一部凹凸が見られる。胎土は密で白色粗砂が多く、かなり大粒の砂粒も混入する。全体的に赤褐色を呈する。

平成16年度 ち-25 表土出土。

第10図19 図版2-13 沖縄産陶器の円盤状製品。捕鉢の口縁部近くの資料で、内面に5本単位の櫛描が見られる。外面に横位の突帯文が見られ、横位の成形痕も明瞭に確認できる。楕円形状に周囲を成形しているが、かなり雑で特に割れの規則性は窺えない。胎土は密で大小の気泡が多く見られる。混和材として白色微砂が見られる。平成15年度 す-22 I層出土。

第10図14 図版2-18 土器の口縁部から胴上部にかけての資料。グスク土器で短頸の壺形となる。文様は見られず、内外面共に横ナデ痕が見られる。器表には小孔が多く見られ、焼成は良好で堅敏である。胎土は密で、口縁部近くには貝殻小片が混和材として見られ、頸部から胴部にかけては大粒の褐色粒子が僅かに混入する。外面はオリーブ黒色、内面は橙色を呈する。平成16年度 つ-26 II層出土。

第10図15 図版2-14 丸碗状の坩堝である。口縁は直口を成し口唇を扁平に整えている。底面は破損のため詳細は不明であるが丸底になると推察できる。炻器質か土器質か不明。平成15年度 す-2 II層出土。



第10図 出土遺物

第6章 総 括

御茶屋御殿跡の調査は、平成12～14年度に茶亭跡の遺構確認を目的とした調査を実施したが、今回の調査では、範囲を広げ、茶亭跡以外の御茶屋御殿に隣接する御番屋等の施設の保存状況を確認することを目的として調査を実施した。現在、御茶屋御殿跡は首里カトリック教会の敷地となっており、教会の施設が建設されているため、調査区の設定には制限があり、予想以上に困難な箇所もあったが、古地図や古写真等の史料でも記載されていない成果も得ることができた。

平成15年度は御番屋跡の確認及び茶亭跡東側斜面下の確認、平成16年度は茶亭跡の西側であり御茶屋御殿の敷地西端、現在の儀間真常の墓の東側に露出していた石積の確認、平成17年度は茶亭跡の南側から東側にかけての石積の確認を行った。

御番屋跡は、現在は首里カトリック教会の玄関前広場として、樹木が植えられ、草木地となっている。調査の結果としては、排水のための管や貯水槽の埋込みの際に搅乱されている箇所が広く、御番屋跡は確認できなかった。

しかし、御番屋跡検出の想定よりも下層から青磁、白磁を包含する層を確認した。この層は琉球石灰岩の上にあり、層厚は約25cmである。ピット等の遺構は確認できなかつたものの御茶屋御殿創建以前に何らかの施設が所在したことを示すものとして重要と考えられる。

茶亭跡東側斜面下では、露出している石積の下層の確認を行つた。結果としては、新しい石積であり、下層には続いていないことが確認できた。遺物も検出されていない。

平成16年度に調査を実施した石積は、はじめに基盤である第三紀島尻層泥岩を掘削し、平坦部を形成した後に積み上げており、石積後背は、栗石を充填せず、第三紀島尻層泥岩を主とした土を詰めている。また、西側の曲線を描く部分においては、根石が滑ることを防ぐために3～5cmの琉球石灰岩礫を敷いている。石積の東端は琉球石灰岩の巨岩に付くが、西端は石積が途切れしており、延長部分についても、確認できなかつた。年代については、石積に伴う遺物がないため、判然としない。

石積の性格・機能については、石積が所在する箇所が、茶亭跡から石獅子が置かれていた箇所をとおる道の延長上にあるが、標高の落差が大きいため、道として直接結びつくとは考えられず、基盤が第三紀島尻層ということから、この地が從来から地滑りの危険があったと考えられ、御茶屋御殿を維持するための土留めとしての機能を有していたと考えられる。また、遺物の出土量が限られているということからも生活の場ではなかつた可能性が高いことが想定できる。

なお、聞き取り調査により、平成16年度に確認した石積付近の、御番屋に御茶屋御殿の竹林や樹木の管理者が生活していたという話を得ることができた。

石積及び周辺から出土した遺物では、少量であるが土器、青磁、沖縄産陶器鉢等があり、土器、青磁に関しては伝世品でなければ、御茶屋御殿の創建以前のものであることは注目に値する。

平成17年度の調査においては遺跡の縁辺部に調査区を設定したため、隣接する平成12年か14年度調査区のように遺構、遺物はそれほど多く確認されていない。前回調査においては戦前の古写真にある茶亭の建物基礎が確認され、間取りもある程度確認することができたが、今回の調査で御茶屋御殿に直接関わると思われる遺構は茶亭の南側と東側にかつて存在していた土留めの石積み遺構が確認されたのみであった。

これら土留め石積みは戦前にはかなり埋没していたようで、とくに東側は石積みを見ることができなかつたという聞き取りを得た。『首里古地図』(1700年頃)では御茶屋御殿の建物構造や建物配置については描かれているものの、これらに付随する構築物に関しては描写上の都合から省略されている。よって、近世期の御茶屋御殿の実態を良く示す遺構と言える。全体的にかなり崩れが見られるが、石灰岩を丁寧に加工した石材を組み合わせており、近世期によく見られる相方積みとなっている。現在の首里カトリック教会車庫南側に見られる御茶屋御殿跡の石積み(図版17)と一連のものであることが、積み方が類似している点と東側延長部に配置されていることから判断される。遺構に伴う出土遺物が皆無であったため、構築年代を特定することはできなかつたが、埋土に赤瓦やガラスといっ

た近代遺物が確認された事から、近代以降はほとんど管理されていなかったことが窺えた。

遺物は 15 世紀から近代まで幅広い年代で得られているが、全て攢乱層からの出土である。よって御茶屋御殿と直接関係する遺物であるかの確認はないが、それと関連が示唆される遺物は軒瓦、中国産青磁碗や青磁壺、沖縄産陶器擂鉢と少ないながらも確認されている。

これまで、平成 12 ~ 17 年度にかけて調査を実施してきたところであり、当初の目的であった茶亭跡の有無の確認、規模の確認及び玄関部分確認は予想以上の成果をもって終了した。その後の茶亭跡周辺の遺構の確認作業では、第二次世界大戦後の造成等の影響及び調査区設定に限度があり、成果にも影響したが、現在の首里カトリック教会敷地内に御茶屋御殿跡の遺構がある程度残っていることの確認はできた。また、今回の調査は保存を目的としているため、上層の遺構を破壊して下層の遺構を確認することはしなかったが、僅かに確認可能であった下層の遺構、遺物包含層、出土遺物から御茶屋御殿創建以前に何らかの施設が存在していたことも、明らかとなつた。

参考文献：

原田禹雄 1997 「東苑をめぐって」『南島研究』第 38 号 南島研究会

久手堅憲夫 2000 『首里の地名』第一書房

平凡社 2002 『沖縄県の地名』

沖縄県立埋蔵文化財センター 2003 「御茶屋御殿—遺構確認調査—」

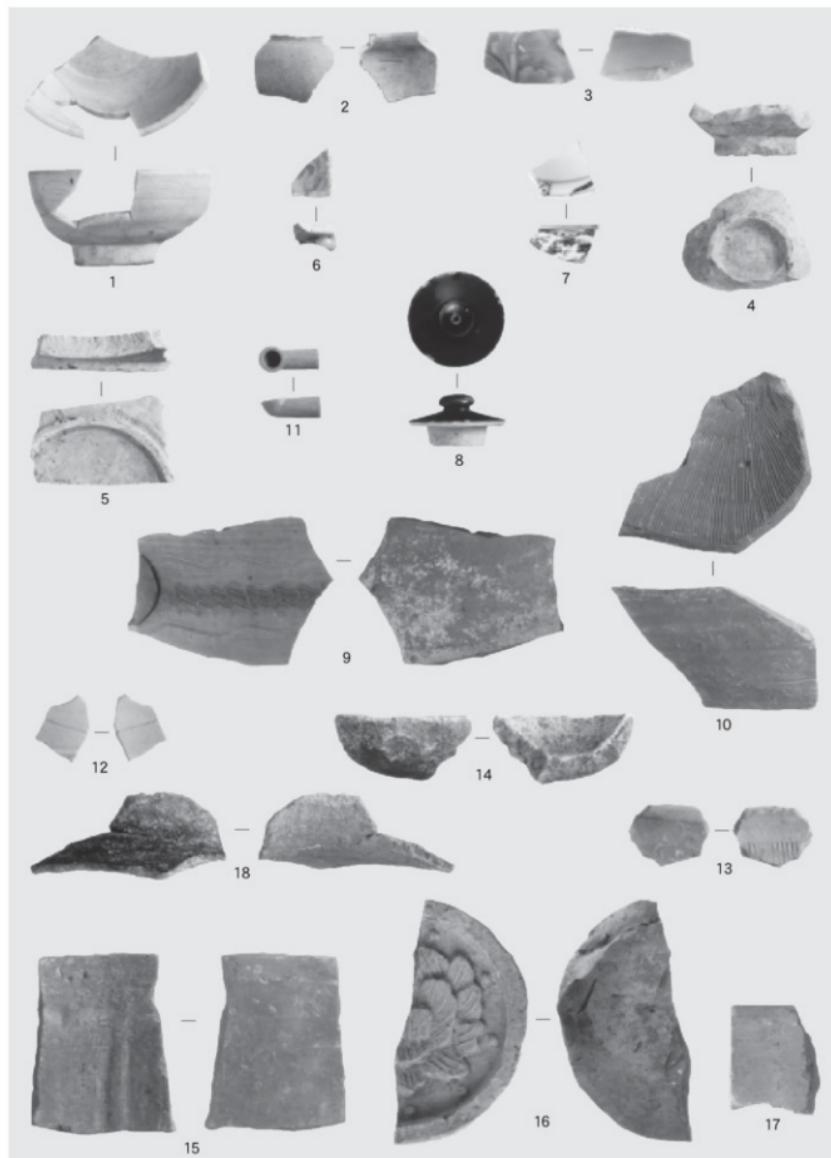
『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 17 集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 「首里城跡－東のアザナ地区発掘調査報告書－」

『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 20 集

ニューサイエンス社 2005 『新日本考古学小辞典』

図 版



图版2 出土遗物



1 調査区（東側より）



2 調査区（東側より）

図版3 平成15年度 調査状況 1



3 調査区南側（西側より）



4 調査区北側（西側より）

図版4 平成15年度 調査状況 2



5 東壁層序



6 北壁層序

図版5 平成15年度 調査状況 3



7 青磁出土状況



8 白磁出土状況

図版 6 平成 15 年度 調査状況 4



9 確認トレンチ1（東側より）



10 確認トレンチ2（東側より）

図版7 平成15年度 調査状況 5



1 調査着手前状況（東側より）



1 着着手前状況（西側より）

図版8 平成16年度 調査状況 1



3 調査着手前状況（南側より）



4 調査着手前状況（東側より）

図版9 平成16年度 調査状況 2



5 造成土除去状況（西側より）



6 捣鉢出土状況

図版 10 平成 16 年度 調査状況 3



7 石積み検出状況（南側より）



8 石積み検出遺構（西側より）

図版 11 平成 16 年度 調査状況 4



9 石積み検出状況（東側より）



10 石積み検出状況（西側より）



11 石積み検出状況（西側より）



12 石積み検出状況（西側より）

図版 13 平成 16 年度 調査状況 6



13 調査区全体（西側より）



14 石積み南側層序（西側より）

図版 14 平成 16 年度 調査状況 7



15 石積北側黄褐色土層除去後（西側より）



16 調査区北側

図版 15 平成 16 年度 調査状況 8



17 調査区（東側より）



18 西壁



1 御茶屋御殿遠景（首里城より）



2 茶亭南側の石積み

図版 17 平成 17 年度調査状況 1



3 調査着手前（調査区南側より）



4 調査着手前（調査区南東より）

図版 18 平成 17 年度調査状況 2



5 調査区清掃後（北側より）



6 調査区清掃後（南側より）



7 調査区清掃後（石積み東側）



8 調査区清掃後（石積み西側）



9 トレンチ 1 (西壁)



10 石積み検出状況 (トレンチ 2)



11 石積み西側（トレンチ 2）



12 石積み東側（トレンチ 2・5）

図版 22 平成 17 年度調査状況 6



13 トレンチ2（南東より）



14 トレンチ2（西壁）



15 石積み栗石（北側より）



16 トレンチ3（南東より）

図版 24 平成 17 年度調査状況 8



17 トレンチ3（西壁）



18 石積み栗石（西側より）



19 作業風景（南側より）



20 トレンチ4（南壁）

図版 26 平成 17 年度調査状況 10



21 トレンチ5（南側より）



22 トレンチ5（東壁）



23 実測風景



24 トレンチ6（北壁）

図版 28 平成 17 年度調査状況 12



26 上空写真1（トレンチ2北側より）



27 上空写真2（トレンチ2、トレンチ5北側より）



28 上空写真3（調査区西側より）



29 上空写真3（トレンチ3西側より）

報告書抄録

ふりがな	うちややうどうんあと						
書名	御茶屋御殿跡						
副書名	平成15・16・17年度遺構確認調査報告書						
卷次							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第40集						
編著者名	山本正昭、知念隆博、岸本竹美、新垣 力						
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター						
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7 Tel 098-835-8752						
発行年月日	平成18(2006)年3月27日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "		
御茶屋御殿	沖縄県那覇市 首里崎山町 4丁目60番	472018		26° 12' 23"	127° 43' 22"	2003.8~ "2005.8	100 m 重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
御茶屋御殿	庭園	グスク時代 ~ 近代	石積み	青磁 白磁 染付 本土産陶器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 瓦 埠 土器 金属製品			

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第40集

御 茶 屋 御 殿 跡

平成15・16・17年度遺構確認調査報告書

発行年　平成18(2006)年3月27日
発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
編集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒901-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL 098(835)8751
印刷　文進印刷株式会社
〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町5丁目10-14
TEL 098(994)5777

沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 Printed in Japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。